「流血メーデーのころ」
（ボールがない、部員はいない、先輩ばかりが大勢）

西高6期　高橋　克彰

原稿のご依頼をうけながら、筆を執りませず、大変申しわけありませんでした。アンケートに記入して、思いつくままに当時のことをメモしました。

昭和26年4月、西高入学、サッカー部の生活は、三年生の浜田さんの「お前、付属でサッカーやっていたんだって」の一言から始まりました。数日後、雨のどしゃ降りの、板橋、北園高の狭いグランドでの試合。

その日から、試合の前に人を狩り出し、「その日の頭数を揃えること」に明け暮れする生活が始まりました。

そして夏、高村、城戸両大先輩に加えて、若手の寺田、横倉、中島その他大勢の先輩を加えての練習、先輩方の練習にぱらぱらと現役が混じっている状況でした。

秋の記念祭のクラスマッチの頃になって、やっとメンバーの心配から免れる事が出来ました。三年生の方で記憶に残っているのは、浜田さん、柳澤さん（ケトル）です。

何年生の時であったのか、何の大会でありましたか定かでありませんが、神宮、今の国立で、横浜の「緑が丘高校」と試合の記憶があります。先方が9人しか集まらず人数の多い方の勝と記憶しております。

二年生になってキャプテンは、恩田さん。一部リーグ戦、大泉高に負けて二部との入替え戦。入替え戦は成蹊のグランドで。ゴール前のフリーキックを外して敗戦、二部転落。

筋が通らない断片が頭に浮かんできます。そして、その年、リーグ戦は部制から、地域別に組み替えられたと記憶しています。この年、隣の豊多摩高が「正月の全国大会」に東京代表として関西に行っています。

記憶に残る人は、三年生では恩田さん、末常（兄）さん、同級生では春木君、山家君、杉田君、林君、松友君、一年下に、末常君（弟）、荒張君等々。

この翌年、確か初めて豊多摩高に勝ったと記憶しています。

記憶の断片を、思いつくままに記しました。先輩方にはお世話になりながら、諸先輩とのマージャンのほかは、現役のお世話は、何の役にも立てず、大変申しわけなく思っております。現在は東京を離れ京都にて、のんびりと日々を過ごしております。　(98. 9. 1記)

リストラの渦の中で

西高7期　荒張　義光

我が西高サッカー部OB会の寺田会長から、この西高サッカー部創立50周年記念誌への出稿の督促を頂いた。お詫びがてら,皆さんどんなことを書いているかをお尋ねしようと職場から電話したところ、「今、仕事中だろう。仕事中にそんなこと考えていていいのか！私用電話などしてクビにならんのか！」と。そんなお堅いことなど言わない人だろうと思っていた“格さん（寺田会長）”からの予想外の対応にちょっとたじろいだものの、「えっ！もう窓際どころかその外にいるようなもので“仕事中”に“こういう仕事”でもこなさないとヒマなもんで……。どうせもうクビになる身ですから」と開き直って答えて、しばらくなつかしい昔話などをした。「では遅ればせながら、なんか書いて出しますからもう少しお待ちください」といって……。さて何を書いてよいものやらと構想を練っていたら、社長が自ら、小生のそばに寄ってきて、小声で「ちょっと」と呼ばれ社長室へ。

「当社の業績見通しも芳しくなく、人手を極力減らさねばならない。今まで人の手でやっていたことを全面的に機械処理へと移行させる準備をすゝめている。従って今度の誕生日（60才すぎると1年契約で誕生日がその都度契約期限となっている）をもってお引取り願いたい」と、平素は横柄な社長がていねいな言葉を慎重に選んでのクビ切り宣言。

格さんの警告ズバリ的中。あまりのタイミングにしばし苦笑。小生第二のおつとめでもあり、既に61才と10か月、老化現象も内心気付くようになっており、ビッグバンに備え、やたらやゝこしいデリバティブなどの新金融商品の仕組みなど理解しようという意欲もなくなっている。もうこの辺が潮時だ、ぐらいは十分わかっている。宣告されることも十分予想はしていた。社長の言うのも会社の立場からすればもっともだし……。かといって問題がないわけではない。アリとキリギリスのお話ではないが、若い時から人付き合いは悪くない方で、老後があることは知っていてもガムシャラに蓄えてきた方ではない。年金もらえば生きてはいけるが遊べない。それに、もうサッカーのグラウンドに立つのはムリとしても日常生活をこなす体力はまだ十分あると思っている。自宅に引込んでしまうにはちょっと早い気もする。毎日家でゴロゴロしていたら女房に粗大ゴミ扱いされて、却ってストレスたまるだけ。なんとか働きに出たい。40年も“勤め人”やっていると、朝家を出て、夕方（殆ど夜遅かったが）帰るというリズムが身についてしまった。このリズム維持のためにも、もう少し働きに出たい。というのが現状で、目下混迷の状態である。あまり切実感の表れていないクビ切り話であるが、何か書かねばならないと“ネタ”を探していたら、こんなことを書く破目になってしまった。

クビ宣言による副産物ということか。こんな恥しい事でなく、もっと楽しいことを書きたかった。原稿を依頼された時にすぐに書かなかったペナルティを受けたような気分である。

今まで付き合っていた友人や元の職場の人達が一人のリストラ社員のために一所懸命に心配してくれている。常に誠意をもって付き合っておくと得難い感激も味合えるものである。

もっとも、この文章がめでたく記念誌に載る頃は、また何喰わぬ顔して、朝、家を出て夕方（多分殆ど遅い時刻に）家に帰るリズムを取り戻しているだろう。

と、希望的観測をしながら残り少ない勤務を楽しんでいる。

※こんな彼も、OB会の席には度々顔を出し西高サッカー部の鎖の一環として,目に見えない力を与えてくれる一人である。それが彼の云う“常に誠意をもって付き合っておくと得難い感激も味合えるものである”なのだろう。（編集部記）

アメリカから

西高8期　松島　晃

先日、米国の自宅に西高サッカー部超OB、大先輩の土岐高史（十中7期）さんからお手紙を頂いた。サッカー部発足50年を期に50年記念誌を作るので気楽に書くようにとのことであった。土岐さんのお手紙で終戦間も無い頃、いかにサッカーに熱を上げたかという思い出話を読ませて頂いた。配給制のボールを手に入れ穴が開くとひとつ潰してこの皮でふさいで使い、しまいにはジャガイモの形のバスケットボール位の大きさになっても使ったそうである。土岐さん達を創部の大先輩として、この50年間私たちが共有してきた共通な何かを通じて、お互い語り合える仲間がいることの喜びを私もこの場を借りて心から分かち合いたいと思う。

私は中学時代3年間ハンドボールをやった。その経験から西高時代も自然とサッカー部で汗を流した。先輩の寺田格郎さん、中島裕さん、横倉千穂さん達（いずれも西3期）が大学生時代で後に春木健一郎（西6期）さんなどによく後輩の指導に来て頂いた。我々は寺田さんの事を格さんと呼んだ。格さんや中島さんの上手なドリブルを拝見して我々も早くあんなにうまくボールを扱う事が出来るようになりたいものだと思った。我々の世代は3年間を通じて勝ち試合より負け試合の数の方が多かったと思う。中学時代にハンドボールをやったという事もあって私はFW、HB、GKなど必要に応じて転々とした。

3年間を通じて私が一番思い出に残る試合はこんなふうに経験した。当時東日本選手権という大会があり、初戦で前年優勝校の山梨県韮崎高校と神宮外苑グラウンドで対戦した。韮崎高校は前年度優勝校であるばかりでなく、本大会でも優勝候補の最右翼だった。試合開始直後から相手チームは怒濤のごとくわが陣に押し入り我々は防戦一方だった。我々は必死に守備し、その甲斐あってハーフタイム直前まで敵に得点を許さず0対0であった。予想外の防戦に相手チームはなかなか得点できず次第に焦りの様子が見え始めた。相手方コーチが顔面真っ赤にして選手を怒鳴り散らしていた。この試合で私はゴールキーパーを受け持った。相手チームはGK一人を残して全員総攻撃を仕掛けてきた。我が軍のボールは松村保君の強力なキックをしても多勢に無勢で、なかなかハーフラインを突破して敵陣に突っ込むチャンスが無く、シュート数は前半戦で約25本を許した。我が軍は相手側のゴールポスト目掛けてたった2本しかシュート出来なかった。そして、ハーフタイム直前に我が軍は、自軍ゴール直前でのミステイクからとうとう1点を許してしまった。その時の相手チームメイトの躍り上がった喜びようは今でも記憶に新しい。これが優勝候補最右翼のチームかと思われるほどの喜びようだった。後半戦は一方的な試合となり試合は7対0で終了した。勝つことは出来なかったが、優勝候補チームに対して我々は全力で戦ったというよい疲労感を味わった。

大学時代も社会人になってからも元旦の蹴り始めを始め、その他の会合にも出来るだけ参加した。その後アメリカ生活が長くなり足掛け25年にもなってしまったが、格（寺田）さんなどとのコンタクトは細々と続いていた。仕事で帰国中、時々格さんに連絡を取り、たまには格さん宅を訪問させて頂いたり、又、私の留守宅に訪ねてきて頂いたりが続いた。そんな矢先（1991年）、仕事で帰国中たまたま格さんと電話連絡を取ったところ、「やあ珍しい！実はサッカー部の超OB連中がNHKの青山荘に集まるので是非参加したまえ。」とご招待頂いた。この会合で今まで何回かお名前を伺いながら今までお目にかかれなかった先輩諸兄を含め約20人の超OBの方々にご挨拶させて頂く光栄を得た。西高1期の関彦太さんもその一人だった。

我々の先輩である格さん達にとっても関彦太さんは先輩で格さん達が関さんに対する言葉遣いからも大変尊敬されている大先輩であることが伺えた。関さんは東大で船舶工学を専攻され、三菱造船長崎に永年勤務された後、三保造船所（株）の副社長となり清水にお住まいだった。私が関さんにお目にかかれたのは三保造船所に移られて間も無い頃だった。そしてその頃私が勤務する米国の会社の合弁会社、子会社、関連会社がいくつか日本に有り、その一つで横浜にある子会社が少額投資している鉄工所が焼津市にあった。その会社の大株主兼社長は遠洋航海を行うカツオマグロ漁船の船主で焼津市では、いっぱしの名士だった。この船主社長がたまたま3番目の新鋭遠洋カツオマグロ漁船を三保造船所に発注した直後のことでも有った。私は米国子会社を代表して横浜の子会社の役員を兼任していた関係上少額ながら投資をしている焼津の鉄工所にも出入りして鉄工所の船主社長とも時々お会いしてカツオのたたきやら、お刺し身をご馳走になって船乗りの苦労話をよく聞いた。

この船主社長に学校のサッカー部の大先輩が三保造船所で副社長をされている話をすると船主社長から真顔で是非関副社長に紹介してほしいと頼まれた。「我々のような零細企業の船主では船を注文しても上級幹部の方々にご挨拶出来る機会など全く無いのです。」と再三頼まれた。断り切れずに関さんに連絡を取ると関さんは気軽に船主夫妻に会って下さった。これも関さんのお人柄の賜物であると私はつくづく感謝した。船主夫妻は正装に近い身なり（婦人は高価な和服姿）で訪問し、持参のカメラで関さんと記念撮影を行った。格さんの説明では関彦太さんもこのスナップ写真の約3年後にお気の毒に癌で他界されたとのことであった。

私は仕事の都合上、ヨーロッパ各国、メキシコ、中南米諸国によく出張する。イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなど何処へ行っても仕事の合間の雑談は大抵サッカーの話である。先日ブラジル出張の際も、サンパウロ空港で私のフライトの機長が何やら黒インクで書き込んだ赤いハチマキ（ヘアバンドでなく正に日本式ハチマキ）姿でキャプテンの制服を着用して私の前を通り過ぎた。私は思わず、「パイロット組合のストライキですか。」と聞いた。「いや、私のひいきのサンパウロチームがグアダラハラ（メキシコの名門チーム）と今日対戦するのでこうして影ながら応援しているのです。」この返事を聞いて、私はサッカー熱もここまで来る

とキ印レベルであると感じた次第である。私の西高の同期生が全日空でB747の立派な機長様であるが、彼が成田空港でこんなことをしたらとんでもない処置を会社側から受ける事になるだろう。

この原稿もようやく終わりに近づいて土岐さんへの義務も全うできほっとし始めた矢先、中南米担当のセールスディレクターが私を訪ねてきた。彼の話によると南米チリにある当社の得意先営業スタッフが首都サンチアゴ市内で家族全員と食事中、たまたまレストランに居合わせた客とサッカー論議で大騒ぎとなりこの営業スタッフは家族の見ている前でその客からスクリュードライバーで刺され重体となり病院に担ぎ込まれその日の内に亡くなってしまったとの事である。つい3日前の出来事である。日本もＪリーグなどサッカー熱は大変なものだが、こんな話を聞かされると刺されたご本人には全く気の毒な事だが我々には全く信じられない世界の出来事である。とはいえ、日本でもごく最近東京六大学野球で明大選手が立大選手に試合中襲いかかり乱闘になって大学野球連盟あげて大騒ぎとなったそうである。スポーツが過熱して騒ぎを起こしがちなことは、洋の東西を問わず同じ事なのかも知れない。

この度、西高サッカー部創立50周年記念パーティー出席者の名簿を拝見するといろいろな世代の人たちが出席しており大変心強く感じた次第である。我々（西8期）もオリンピックの開催年に同窓会を大々的に行っている。当時の先生方も大分お年寄りになられたがそれでも多くの先生方に出席して頂いている。我々同期の仲間には忙しい毎日の仕事の合間を縫ってもう何年も裏方のまとめ役をしてくれている同級生がいる。こうゆう人がいてこそ同窓会などがよくまとまるものだ。また、もう一人の同級生は私が帰国するとしばしば数人の同級生仲間を急いで集めてくれて、ささやかな夕食会などを開いてくれる。こんな時、余得で同期サッカー部員とも交換のチャンスがある。サッカー部OB会でも現会長の格さんは当にそんな役柄にふさわしい人だと思う。NHKを退職後、学校で「常識」論を教えている格さんはOB会会長兼裏方のChief Executiveである。

私は母親譲りの心臓に関する疾患のため、過去20年の間に米国で3回の大病を経験した。その都度、ミネソタ州のメイヨークリニックにお世話になり生き延びて来た。そして、一生懸命リハビリをして一応ひとり前に回復する事が出来た。その為、もうサッカーのような激しい運動は、大分前から出来なくなってしまった。それでも出張の度にテニスシューズを持参して、ホテルのヘルスクラブやら近くの公園等で適度な運動を心がけている。そんなこともあって、私は本屋で時間を潰すのが非常に好きだ。本屋にはいろいろな種類の書籍が有り、例えば人生の生き方についていろいろ述べた本等も沢山有る。こんな本を読みながら将来を見据えて生きる人もいるだろうし、それはそれで大切な事だが、共通な何かを通じて過去、現在、将来を語り合える仲間が世代を越えている事は何よりも大切な事だと思う。私はこの共通な何かを通じた絆をいつまでも大切にしたいと思う。

（米国イリノイ州インバネスにて　97. 10. 23記）

サッカーに魅いられて

西高9期　梅田　　清

西高サッカー部の活動での記憶を次に書いてみます。

一年生の春、東日本大会1回戦対日川高校戦（神宮競技場）に出場し、ズック靴で頑張ったこと。0－5位で敗れたこと。

以後試合の度にメンバーを11名揃えることに四苦八苦したこと。

3年の3学期までサッカーを続けたこと（西高の勉強に落後したのですが）。すっかりサッカーが好きになり、大学でも続けたいという願望を3年生の頃強く抱いたこと。下見のつもりでグリーンパーク（武蔵野）に大学2部リーグを観戦にいったこと。

一橋なら通用しそうだと確認したこと。大学でサッカーをすることが、受験勉強の強い動機づけになったこと等など。

思えば、西高はサッカーという豊かな果実を自分に与えてくれた訳で、感謝の気持で一杯です。一面、OB会にも現役にも何の貢献もせず、心中忸怩たるものがあります。

思い出

西高10期　内藤　隆史

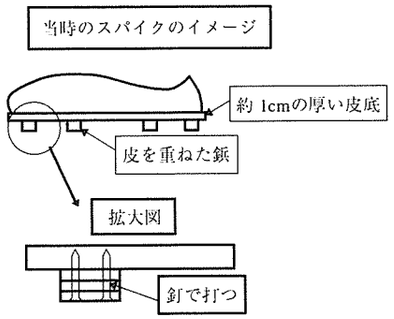
部活動の一番の思い出というと、対外試合をするためにとにかく11人を揃えるのにいつも苦労していたということでしょうか。となりの部室がタッチフットボール部（防具をつけないでやるアメフト部）で、ここも部員不足で私も対外試合に駆り出されてラインメンとして出場したこともありました。我が部のほうはさすがにそんなことはありませんでしたが、このような状態であまりぱっとしない戦績であったと思います。

私は高校から始めたので下手くそでしたし、鈍足で背も高いほうでしたので、バックスでした。これは東大の4年間もそのままで、現在のようにディフェンダーが攻め上がるような戦術はとらないので、ゴールをねらうチャンスがなく、フォワードをやれなかったことを今でも残念に思っています。

歴史的な意味での出来事としては、我々が2年生の昭和31年（1956年）の夏から新鹿沢温泉での夏合宿が始まったことでしょう。冬場はスキー宿となる旅館が、キャベツ畑をつぶした火山灰のグラウンドを何面か用意して合宿を受け入れていました。諸先輩の応援（寄付）をうけ、まだまだ、食べることで精いっぱいの時代に、泊まりこみの合宿ができるということは画期的なことでした。参加者は11人に満たないという淋しいもので、練習もきつかったのですが、一生懸命に部活をやった中で最も楽しい思い出です。

もう一つ忘れられないのがスパイクの鋲打ちです。部室には靴を被せて釘を打てる靴屋が使

う台、厚い皮の切れ端、その皮からスパイクの鋲（直径20mm程度）を丸く打ち抜くためのポンチなどが用意されていて、自分でスパイクの鋲打ちをやりました。試合をするとき位でスパイクはあまり履かなかったと思いますが、この皮製の鋲がすぐとれてしまって何度も打ち替えなければなりませんでした。今のスパイクからは想像もできないようなものでしたが、当時としては値段は高く大事に使ったことが忘れられません。



サッカー部の火を守って

西高11期　石島　紀之

11期は部員がわずか６名程度で、それも中学時代にサッカー部に入っていたのは、大塚君と南里君の２人だけ、大嶋君と尾形君と僕は全くの未経験者という低調期だった。部員の数がたりず、入部したての僕が公式戦に左のウィングとして試合にだされることになった。まだ満足にトラップもできないひどい状態だったが、ゴール前を流れてきたボールが走り込んだ僕の身体にあたって、初得点をあげるというハプニングもあった。

1年生のときの先輩は、３年生では梅田さんがときどき練習に顔をだされたほか、２年生では主将の田中さんをはじめ、川上さん、内藤さんたちが素人の僕たちをきびしく、かつ親切に指導してくださった。とくに部の日誌の川上さんの文章は印象深く覚えている。川上さんはたいへん筆のたつ方で、よく長文の文章を書かれたが、そこにしばしば『赤毛のアン』からの引用がでてきた。外見はどちらかといえば無骨な川上先輩と『赤毛のアン』との取り合わせはなんとも不思議だったが、僕たちをはげまそうとする先輩の気持ちがあふれていた。１年生のときのもっともなつかしい思い出は新鹿沢での夏合宿である。身体ができていなかった僕にとってはきびしい合宿だったが、なんとかがんばりとおして自信がついた。練習後、グランド脇のわき水のおいしかったことも忘れられない。

2年生になって西山君と交替で主将をつとめた。小山君はじめ力のある後輩が入部してきてチーム力は強化されたが、練習に部員を集めるのがたいへんだった。ときどき放課後、通用門で部員を待ちかまえて、練習に参加するよう説得したこともあった。新鹿沢の夏合宿は、参加数が中島先輩、３年生の川上さんをふくめてたった８名のさびしいものであった。サッカーがマイナースポーツであった時代の話である。こんな状態だったので公式試合にはあまり勝てなかったが、それでもなんとかサッカー部の火を絶やさなかったことが功績といえようか。岡田先生と寺田さんはじめ諸先輩が僕たちをあたたかく指導してくださったおかげである。

大学ではサッカー部には入らなかったが、卒業後、勤務した成蹊高校のサッカー部の顧問になり、退職するまでの11年間、生徒と一緒にボールをけり、あるいはレフェリーをつとめた。それ以後は、サッカーをする機会はなくなり、もっぱらテレビで観戦するだけである。しかし、西高サッカー部できたえた体力と気力は今でも僕の大きな財産になっている。

西高時代の思い出よもやま

西高12期　村上　錠作

諸先輩がおられながら、私がこういうのも僭越かもしれませんが、昭和32年まだまだ「戦後」という言葉がぴったりの時代に私たちは西高に入学しました。

正門前の井の頭通り（当時は水道道路と言っていました）は今では片側２車線の狭い幹線道路ですが、自動車台数が少なく、小型車が殆どの当時は文字どおり大きな道路で、そこを徒歩10分で通学したのを懐かしく覚えております。

当時は、今ほどではないまでも、サッカーはまずまずのメジャーの部類に入っており、私たち12期は10名の部員をかぞえ、西高の中でも大きな顔だったように思います。

私（慶大→三菱樹脂）と赤坂君（早大→ニコン）花沢君（慶大→ニチメン）は中学時代からの同級生で中学時代から共にサッカーを嗜み、今でもその当時の仲間10名ぐらいで一緒に旅行を楽しんでいます。

卒業後40年経過とともに若き青春時代の記憶はとみに薄れ、当時は辛かっただろう出来事も、今では「へー、そんなことあったの？」と懐かしさの方が先にたつようになりました。

主将の横尾君（慶大→大門精機）、岡田君（慶大→三菱鉱業セメント）にも大学時代キャンパスでよく出会ったものでした。

団体競技の楽しいところは、学年の上下にかかわらず、共に同じレベルで相手と戦い、意を通じ合えたことと思っております。

残念ながら個々の試合の思い出は薄れ、ただ「いつも負けてたな」というぐらいになってしまいました。

最後になりましたが、いつもOB会報を編集、送付して下さり大変ありがとうございます。いつも懐かしく、楽しく読ませていただいております。

12期のみなさん、還暦前に一度全員集合しませんか。

想い出

西高13期　白石　紀彦

小生が西高サッカー部に所属していたのは、昭和33年４月～36年３月までの３年間であるが、当時は受験勉強のため３年生の春のリーグ戦まで活動することが一応の決まりであった。従って、正確には昭和35年５月末で部活動の第１線から引退したことになる。もっとも、２年生の冬にある新人戦を区切りに活動を退く人が多かった。我々13期生は田代、香山、白石のフォワード３名のほか、バックスの高嶋、山本も含め、３年の春のリーグ戦まで第一線で活動したので、当時としては画期的であった。我らフォワード３名は「花のトリオ」などと称して、最後までガンばったことを自負していた。以上のような理由で、春のリーグ戦は部員が足りなくて困ったこともあった。

小生は中学時代にサッカーを多少経験していたので、入学式の３日後の土曜日の昼、同期の小林と部室を訪ね入部の希望をしたが、その場でキャプテンの西山先輩から「明日、豊多摩高校でリーグ戦があるから来るように。メンバーが１名足りないのでよかった」と告げられ、真新しいユニフォーム（11番）を渡され当惑した。リーグ戦は、豊多摩、立川、桐朋、成蹊、西がブロックであったが、豊多摩、桐朋が強く西高は二位か三位であった。

メンバーが揃っている新人戦のときの方が、西高には有利であったのか、小生が１年生のときの新人戦では、東京都で準決勝まで進み、当時最強の私立城北高校に１－２で惜敗したのが、最高の戦績であった。

練習は、火、木、土の放課後で日が暮れるまでやった。寺田先輩と内藤先輩が良く指導にきてくれた。寺田先輩はサッカーユニフォームスタイルのままで自転車で乗りつけ、かなり厳しく（？）指導してくれた。時々、寺田先輩が指導に来ないときは、部員は皆ホッとして、のびのび練習をした。

当時のグランドは、ゴールネットの後ろがテニスコートになっており、シュート練習でよくボールがゴールポストを越えた。テニスコートにスパイクのままボールを取りに入ることは禁じられていたため、ボールの回収には往生した。数年前、１年後輩の藤原（現、お茶の水女子大教授）が新潮社の文庫本のエッセイのなかで、このことに触れ、「テニス部の女子が練習しているので、故意にシュートを外し、テニスコートに蹴り込んだ」と述懐しているのを読み、そうだったのかと納得した。

夏には、群馬県嬬恋村の新鹿沢温泉で２泊３日の合宿があった。渋川から吾妻線で終点の長野原で下車し、バスで40～50分、古びた温泉宿が４～５軒の場所であった。小生は１年と２年のとき２回参加したが、宿は「鹿鳴館本館」と「鹿鳴館別館」であった。名前は立派であったが、２階の部屋の床下がむき出しになっており、１階の部屋の天井を見上げると２階の部屋の掘ごたつがぶらさがっていた。

朝６時に起床して、馬ふんが真ん中に延々と続く砂利道を、雨の中２～３kmだらだら坂を下った田代湖という灌漑用池まで馬ふんを跳ね上げながらランニングをしたりした。練習グランドは、宿から５分ほどの高原キャベツ畑の中にあった。夏でも24度以上の気温になったことがない涼しさであったが、霧がよく出て数m先が見えなくなることもあった。

合宿での思い出で一番印象に残っているのは、２年生の合宿の最終日のことである。午前中の練習が始まって間もなくのことだった。鹿鳴館別館の女中さんが「火事だ！」と叫びながらグランドまで走ってきたのだ。即、練習を切り上げ、消火活動のため全員で宿に走った。我々の宿舎の隣の旅館から火の手が上がっていた。何分にも山の中の温泉宿でもあり、消防隊が手押しポンプを持ち出して消火活動を開始したのは、我々が現場に到着して10分以上経ってからだった。近隣の宿の従業員、我々を含めて20名位で池の水をバケツリレーをして懸命に消火したが、火勢は益々勢いを増しバリバリと音をたてて燃え続けた。延焼を防ぐため、離れへの渡り廊下を壊すことぐらいが精一杯であった。髪の毛、まつ毛がチリチリとするほどの熱さであった。火の粉で腕にやけどをした者もいた。

結局、２階建ての旅館１軒を全焼して12時半過ぎに鎮火したが、最後の昼食をそそくさと取り、従業員全員に見送られて２時頃のバスで帰路についた。渋川駅で乗り換え待ちのとき、誰かの携帯ラジオで「新鹿沢の旅館全焼。被害額数千万円」というニュースを聴き、合宿の疲れも忘れ大変充実感を味わったものだった。

新人戦ベストフォーへの道

西高13期　田代　忠之

昭和34年春、新人戦東京大会準決勝。武蔵野サッカー場は、春一番の強風、相手は私立城北高校。１対１で迎えた延長戦、双方消耗の極のなか、敵MFの蹴ったロビングともシュートともつかぬ高いボールは、強いフォローに乗ってゴールバーの下をかすめてネットへ。アンラッキーな失点で決勝進出ならず。砂塵のかなた、ゴールに吸いこまれるボールを見送った無念さは、今も忘れられない。私立城北は、勢いに乗って優勝。「実力２位だ」とわれわれは慰め合い、そして誇った。

準々決勝では成城高校と対戦。更衣室で煙草をふかしつつ、高そうなスパイクのひもをしめる敵イレブンの大人びた振舞いに、純朴なわがイレブンは呑まれ気味。が、なんのことはない、ピッチに立てば実力の差は歴然で、点差こそ開かなかったが、快勝してベストフォーへ。

ここに至るまで、かなりハードな練習の明け暮れだった。力をつけ始めたチームを見て、OBの内藤さんが、連日自転車をこいでコーチに見える。寺田さんが、シワちゃんとならんで檄をとばす。「田代！そこは香山にパスを出さにゃあ」。OBの暖いしごきのおかげでベストフォーに残れたのだが、練習仕上げのインターバル10周はほんとにきつかった。日もとっぷり暮れて、「目の出屋」で家に辿りつくだけのエネルギーを補給するも、駅の階段で足が上がらない。風呂に入ってめしを食えば、あとは眠いだけで、リーダーの単語を引く元気もない。しかし、思い返せば、好きなサッカーができたのだから、もっと身を入れて練習を楽しめばよか

った！？

かくして、サッカーは私の人生に欠かせないものとなった。顰蹙（ひんしゅく）を買いながらも、未だに社のチームの最長老として、時折ピッチに立つ。さすがに背番号10は数年前に返上したが……。

西高サッカー部の仲間

西高14期　樋口　　洵

何分37年前のことで大分記憶がおぼろになっているが、同期の部員が多かったこと（12人）、小生を含め同じ中学（学芸大付属中）から5人も入ったこと、中学での経験者が多かったのでそこそこ強かったこと、同期の仲間の成績がやたらに良かったこと（進路がわかっている10名の内、東大7、東工大1、早大1、慶応1）が印象に残っている。

また、1年の夏合宿（新鹿沢）で宿舎の旅館が火事になり、女中さんの急報で我々もグランドから駆けつけて、バケツリレーで消火を手伝い、幸い台所を焼いただけで消防車が来る前に消火して大変感謝されたことが良い思い出となっている。

仲間が多かった分、卒業後の交流も多く、同じ会社（IHI）に同期が1名（岡崎）、1年後輩が1名（栗林）いるのを始め、中学高校が同じ仲間（藤原、池田、永井、高橋）とはクラス会等でも良く顔を合わすし、大学が一緒になった小林には最近我が家を建ててもらつた。卒業後の分野が同じ丹羽とは学会等で良く会う。地方に行ったりで会えない仲間（京谷、岡田、羽子岡）もいるが、顔を合わせればたちまち共に汗にまみれた青春時代に戻って、楽しくサッカーの話などができるのが本当にうれしい。

◀1956年元旦の蹴り初めを終えたOB、正月の蹴り初めは10年位続いた。

1955年10月25日の記念祭▶で現役・OB戦後記念撮影。草創期のOBはすでに社会人となっていた。

皺ちゃんの思い出

西高14期　藤原　正彦

昭和三十年代の中頃だったが、都立西高に入学した私は、躊躇せずサッカー部に入った。中学校時代からサッカーに夢中だったので、入学式の前から勉強というよりそのことばかり考えていた。

四月になるとさっそく、週に三回、厳しい練習が始まった。受験勉強に忙しい三年生を除く全部員がこれに参加した。コーチ陣は主に、大学でサッカーをしている先輩達だった。休日や夏の合宿には社会人のOBもかけつけた。受験校にはめずらしく、都の新人戦で三位になるほどのチームだったから、コーチ達の指導にも熱が入っていた。

数少ない経験者の一人だった私はすぐに正選手となったが、それだけ練習もきつかった。練習のあった日は帰宅後、疲労のため何もする気になれずボーッとしているほどだった。

サッカー部の顧問は数学の岡田先生だった。私は先生の授業を受けたことがなかったが、全生徒の名前をすぐ覚えてしまうという噂の人だった。謹厳実直な先生は暑い日も寒い日も、ほぼ毎回背広姿でグラウンドに出られ、練習の終るまでサイドラインの外でじっと立っておられた。小柄できゃしゃな身体の先生は五十代半ばだったが、白髪まじりの坊主頭で顔には年相応以上の深い皺が刻まれていた。額に横皺、眉間には何本もの縦皺、あごには横皺、口元と頬にはくの字の皺、と顔中が皺だらけだったので、あだ名は「皺ちゃん」だった。吊り上がった黒く太い眉と鋭い眼光が、初対面の人にやや威圧感を与えるが、実はすこぶる温厚で、時には少年のような含羞を見せることさえあった。

先生にサッカーの経験はなかったはずである。稀にボールが先生の方へ飛んで行くと、慌てて逃げたからである。逃げ方のぎこちなさから、多分いかなるスポーツもされたことがなかろうと思われた。ほとんど無言のまま練習を見ておられるが、先生のすぐそばを走る時など、「藤原ガンバレ」とか「藤原サボルナヨ」などの低い遠慮がちな声が聞こえることもあった。

休日に行われる対外試合にも必ず同行された。その場合も、技術的批評や作戦について語られることはなく、ガンバレ程度のことを口少なに言われるだけだった。

生意気盛りの高校生だった私は、入部してしばらくの間、先生を変人と思っていた。練習毎にグラウンドに出てきて、最後まで見届ける顧問教官など他に一人もいなかったし、技術指導はもちろん精神訓話を垂れるわけでもなく、ただ立ちつくしているというのも奇異に映った。

新鹿沢温泉で行われた夏の合宿でも同様だった。練習中はサイドラインに立ち、夕食後は我々がふざけたり話しているのを、部屋の隅に正座して見ておられた。十分に一度くらい口を開いて誰かをからかったり、皺だらけの顔を真赤にして笑ったりした。

ところが不思議なもので、いつの頃からか、岡田先生の姿がサイドラインに見えない　と、張り合いなく感じられるようになった。皆もそうだったようで、そんな時には練習の合間に、「皺ちゃん今日はどうしたんだろう」、などの言葉が交されるようになった。そして次第に、こ

の暖かいまなざしだけの先生に対し、慈父を慕うような気持ちが育くまれて行ったのだった。

コーチ陣を含む先輩達までもが、一様に先生を敬慕しているのは明らかだった。社会人となっている鬼コーチが、先生に呼び捨てで話しかけられたとたん、しゃんと背筋を伸ばし生徒のようになるのは、私にとって初めは意外だったが、いつしか心暖まる光景となった。

先生が独身であるという噂を聞いたのは、二年生になってからだったと思う。戦後のある時期に講堂の一角に居住しておられたが、その後は西荻窪辺りのアパートを転々とされていたとも聞いた。尋常でない皺は、先生の経てこられた尋常でない半生を物語っているのだろう、と子供心に思った。

卒業して二十年以上もたった昭和六十年の夏、岡田先生が千葉県鎌ケ谷市の病院に入院されていると人づてに聞いた。なぜか私は矢も楯もたまらずお会いしたくなり、その週末に先生を見舞うことにした。

先生は頭を窓の方に向けて横たわり、目を閉じていらっしゃった。睡眠中か、と足音を忍ばせたとたん、懐かしいぎょろ目を見開いて私を見つめられた。老齢と衰弱に一瞬息を呑んだ。わざとそれを振り払うように、

「西高でお世話になった藤原です。サッカー部の藤原です」

とせきこむように申し上げると、

「おー藤原か」

とおっしゃり、目元をゆるめられた。このとき突然先生の目に当時のまなざしが蘇った。このような老衰の床にあってさえ私を覚えていてくれ、あのまなざしを投げかけて下さったこと、そして昔通りに呼び捨てにしてくれたことに、言い知れぬ感動を覚えた。慌てて起き上がろうとする先生に、横たわったままでおられるようお願いすると、

「もうこんな身体になってしまってね」

と詫びるようにおっしゃられた。先生と私が一対一で話したのは、この時が初めてのような気がした。

先生が日露戦争の頃、愛媛県の瀬戸内海に面した伯方島でお生れになったこと、物理学校を卒業されたこと、先生の唯一の身寄りである姉上が弱った先生を見かねて、ここへ入院させたこと、などをうかがった。深い皺に隠されたものまでは語っていただけなかった。開け放った窓から一面の果樹園が眺められ、先生もお気に入りのようだった。

西高の話題になると、弱々しかった先生の声に張りが出た。毎日繰り返し読んでいるのだろう、枕元にあった教え子達からの手紙を見せて下さる時は、本当に幸せそうだった。「それほど正確に卒業生の名前をいまだに覚えていらっしゃるとは、実に驚きました」

と申し上げると、先生は私を見据え、

「私は西高の思い出だけに生きているのです」

ときっぱりと言われた。家族も家も財産も求めず、生徒だけを愛しその成長のみを祈りつつ生きてこられた先生のお言葉だけに、胸にしみるものがあった。

帰りの電車から、先生の病院と広い果樹園が眺められた。病院の白と果樹の緑が、周囲から浮き上がるようにくっきり見えた。この時ふと、「もう先生にはとてもお会いできないだろう」と思った。電車は、速度を上げレール音を上げた。線路端の向日葵が大きく揺れた。

サッカー

中学校では何となくサッカー部に入ったが、高校では迷わずサッカー部へ入った。我が校は当時、都の新人戦で三位になるほどの実力で、今度こそインターハイの東京代表になろうと、活気に満ちていた。

週に三日、大学や実業団のサッカー部に在籍する先輩達がコーチに来て、私達を鍛えた。二時間の厳しい練習で、足が思うように動かなくなってから、さらにグラウンドを十周する、という猛烈ぶりだった。こんな日は、這うように家にたどり着くと、夕食をとる気力も、机に向かう気力もなく、ただぼんやりしてるだけだった。楽しいと思ったことはあまりなかった。それでも退部しなかったのは、一週間もサッカーから離れていると、足がボールの感触を無性に求める、という一種の中毒症のせいだったかも知れない。

経験者ということで、私は一年生の時から正選手となった。私の得意は、頑健な身体を利用した押し合いへし合いだった。また二十メートル位の短距離なら抜群の速さだったから、相手と私から等距離にあるボールの争奪では、大てい有利に立った。正面衝突を恐れなかったから、相手がひるむことも多かった。

逆に大きな欠点が一つあった。持久力不足のため、試合途中で息が切れてしまうことだった。そうなると、自分のそばにボールが来た時だけしか走らなくなる。試合中、コーチから、「サボルナ藤原、皆苦しいんだ」とよく怒鳴られた。最初は名選手、最後は戦力外という妙な選手だった。

怒鳴られたと言ったが、実は私はチームの叱られ役だった。練習中、試合中、ミーティング等で、ほとんど常に私が真先に批判され、最も厳しく叱責された。そうすることで、他の者は批判されてもさほど傷つかずにすむのである。気が強くて楽観的な私が、適役と判断されたのだろう。私は家でも同様の役を果たしていたから、特に傷つくことはなかった。

思い出深い試合は、ある強豪都立高との試合だった。同点で迎えた後半、私の強烈な中距離シュートが見事に決まり、我々が勝ったのだった。コーチには、「藤原が最後まで動けばあと一点はとれた」といつも通り叱られたが、私は満足だった。

試合後に事件が起きた。校庭の隅にたたんでおいた私の衣類が、消えていたのである。付近を探すと、少し離れた農道の脇に、さすがの泥棒も嫌ったのか、下着だけが投げ捨ててあった。口惜しかったのはベルトだった。これには、少し前に田舎の田で殺した蛇から、やっとの思いではいだ皮が、勇気の証しとして、セメダインでぐるりと貼り付けてあっのである。泥だらけの毛脛のまま乗ったバスで私は、勝利のうれしさも半減し、小さくなっていた。

我々が最大目標としていたインターハイ予選は、何回戦かで都代表の常連私立高と当たった。1対0でリードされた後半、私が同点となるはずのペナルティーキックを外したため、そのまま我々は敗れた。都代表の夢は消えた。落胆は大きく、試合後の円陣では誰も口を開かなかった。コーチが、「皆良くやった。今日はゆっくり眠れ。解散」とだけ言った。私が叱られなかったのは、この試合だけだった。

（新潮文庫「父の威厳　数学者の意地」より抜粋）

皮の風船

西高15期　小林　　武

誇らしくも、愛していた西高へ通っていたのは、水道道路の真中を両手離しの自転車でスラローム出来た頃でした。35年も経ってしまいました。

ボールは同じ丸とはいえ、皮色の12枚剥ぎのミクニのビクター号。おろし金のような小砂利混じりの硬いグランドでこすられ、挙句２度３度プールを泳げば、艶はたちまち失せ、けば立ち、容積は２倍程にもふくらみ、皮製の風船となってしまった。これとても、１度の練習にボール５つ集まれば御の字だった。

入学の直後は結構いた部員も、最初のテストが終る頃には7～8人にその数を減らし、３年生を見掛けるのは大変希で、中心たるべき２年生も夏休み前には、レギュラーの半分の数になってしまう。良いメンバーを組むなぞ夢。キーパーを含む選手11人を揃えるのが、いつも試合当日の最大の悩みだった。スパイクを穿いているのが幾人いたろうか。ジャージーの数は11に足りていたのだろうか。何年前に揃えたのかボロボロで裏を見るまでその色を判別するのが難しい程だった。

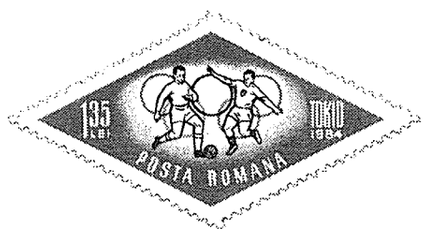
試合中でも、ストッキングは足首に下げたまま脛まる出し、ジャージーの裾は短パンの外にダラリと出したままでも、主審の注意を受けることはなかった。あの見るのも落ち着かない、試合後の相手チームのダグアウト前の整列挨拶も無論なかった。

思えばのんびりした時代だったのでしょう。ですが、今の半分程のボールと、半分程の世界のサッカーの情報が手に入っていれば、もっと旨くなれたかもしれないと少々残念な時代でもありました。

思い出

西高15期　山下　邦男

私のサッカー部時代は、練習嫌い、根性なしで、コーチの先輩方は大変手こずったと思います。サッカー部時代の事柄は余りよく記憶にありませんが、昭和36年の夏の合宿時の練習中、後輩にアタックされ、右手首を骨折し、合宿途中で先輩（氏名を失念し申し訳ありません）に自宅まで送り届けられ大変迷惑をかけた事を覚えております。



私の西高サッカー部時代

西高16期　平尾　　修

1年当時はかなり居たのですが、２年になって同学年のメンバーが４人と少なく、１年生が過半数を占めるチームを組んで、全国大会等に臨みました。確か全国大会予選１回戦は、実力テストの翌日で（？）九段高校と引きわけ、ジャンケンで２回戦に進みました。２回戦は羽田工業高に2：0で快勝。３回戦で教育大付属高に完敗し、実力の差を感じました。（それでも確か東京都Best16に残った格好になったと思います。）

1年下のメンバーは約15名と多くなり、更に２年下は30名近くなったと思います。メンバー数の増加とともに、成績も上がり、２年下のチームで確か東京都ベスト４まで行ったと記憶しています。

公式戦以外では、立川のアメリカン・スクールと親睦も兼ねて、何回か試合をしました（引分けはあっても、一度も負けてはいないはず）。武蔵ケ丘高校とも練習試合（こちらは共にHome Game をものにした格好で５分）。一橋大学の教養課程メンバーとも試合した記憶があります。

2年上の樋口さん他、１年上の小林さん他、同期の３人、１年下の星野君他、２年下の小安君他、そして岡田先生、OBの皆様深謝。

3年の秋まで兎に角サッカー一筋の高校生活でした。　(97. 10. 6記)

西高のサッカー

西高17期　川上　徹治

昔の事で記憶もあいまいですが、懐かしさで一杯です。

西高は、当時から進学校であったので、クラブ活動に参加しない人も多かったし、特に２年生の夏からは、メンバーが減りました。それにも負けず新人戦は、良い成績だったと思います。

我々17期は、16期が４人しか居られなかったので、一年生の夏から、試合に出られました。反面、18期が非常に強力であったので、早期引退（？）をやむなくされたと思います。又、１年の時、アメリカンスクールと試合をし、芝のグランドに感激しました。

当時非常に強力だった私立城北高との試合は、４－０で負けましたが、OBの方々から「良く４点におさえた」と誉められた反面、城北高はコーチから「都立を相手に４点とは」と怒られていた事を何故か思い出します。

サッカー部の仲間の方々には、いろいろとお世話になっています。特に寺田格郎大先輩（３期）には、大変お世話になりました。軽妙な話題で我が家で最も人気のあるOBの方です。紙面を拝借して御礼申し上げます。

サッカー部にいた頃

西高17期　宮地　信良

小学校の時分、体が弱く、体操の時間は「見学」が多かった私が、高校に入学してサッカー部に入ったというのは、無謀とも言えただろう。もともと山が好きだった私は、西高へ入学当初、ワンダーフォーゲル部へ入ったのだが、山を歩くことは、個人でもできるような気がして、２～３ヶ月で退部してしまった。そして個人では不可能で、しかも山登りにも役立ちそうなサッカー部に入ったのだった。

当時、サッカーは全く人気のないスポーツで、その頃開かれた東京オリンピックのチケットも、学校に大量に割り当ててもさばけない程であった。駒沢の小さなサッカースタジアムの観客席は、学校毎にかたまった黒い学生服の集団が、あたかも市松模様のように点在していた。

さて、入部してからが大変だった。体力も強くなく、運動神経も良くない方の私は、パスもドリブルもフェイントも皆のレベルになかなかついて行けず、練習のたびにみじめな思いを味わった。それでも、昼休みに校庭で輪になってキックの練習をする時だけは、一般の生徒よりボールが飛んだので、唯一の楽しいひとときだった。こんな私も、時々は試合に出してもらえた。今でも強豪の帝京と、試合をしたことがあったように思う。こんな私も、大学に入ってまたこりずにサッカーを続け、やつと体力、気力、そして自分の人生にも自信がついて来たのだが、これは何と言っても西高サッカー部のおかげなのである。今、サッカー部には本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

『我々を育てた西高サッカー部』

西高18期　小安　　亮

平成４年11月18日、青森空港に商工中金青森支店長であった私は、講演会の講師を出迎えていた。飛行機から先頭で出てきた初老の、しかし眼光鋭い人が、長沼健氏（前日本サッカー協会会長）であつた。思っていたより小柄な人だか、握手するとこちらに力が伝わってくる不思議な魅力を与えてくれた。空港の貴賓室で新聞記者のインタビューを経て、私と二人で昼食に向かった。1964年東京五輪、1968年メキシコ五輪当時の話になり、クラマーコーチや宮本征勝、宮本輝紀、小城、山口のプレーを語った。商工中金の講演会で、講師長沼氏が最初に、「こんなに、サッカーを解っている人に招かれたことはありませんでした。」と切り出して頂いたのが、私にとり嬉しかった。

その時、私が長沼氏を呼んだ意図は、青森にワールドカップを招致することだった。キング・ペレを、アドバイザリー・スタッフとして青森県は呼んでいた。最初の15都市段階で、サッカー不毛の地といわれていた青森は当選した。長沼氏を案内した競技場予定地を掘り返したところ、なんと縄文時代の遺跡が発掘された。これが『三内丸山遺跡』である。この後、日韓共同開催となり11都市に絞られ、青森は落選した。しかし、日本の歴史を塗り替えることになる『三内丸山』遺跡は、まぎれもなく2002年ワールドカップ招致運動のビッグな落し子なのである。

我々は、今でも西高サッカー部の経験を、自らのルーツとして誇りに思っている。昭和39年11月22日都立小石川戦、１－０で西高は全国大会都予選ベスト４に名乗りを上げた。この日、都立高校の頂点に立った。実は、この時の小石川の主将・GK山口が５年後、商工中金に入り、私とチームメートになり、商工中金サッカー部の黄金時代？を二人で作ることになる。またこの大会の直前、強豪石神井高校と対戦したことが我々のレベルアップに寄与した。この時の相手主将が、Ｊリーグ審判委員会委員長の高田静男さん、東京教育大全盛時代のHBをつとめ、ワールドカップで日本人初の審判となった人である。

我々18期、13人は西高で初めて同一学年で１チームを編成できた。一人一人個性があり、しかも団結力があった。また小山先輩、小林先輩に厳しく指導して頂いた。素晴らしい、尊敬できる先輩であった。しかし、我々は密かに、先輩達の指導方針に反発した。私は主将として、夏の合宿の直前、小林先輩と大議論をし、我々のメニューを押し通した。結果は秋の全国大会に出る。この緊張感が好結果を生んだのではないかと今でも思っている。自分たちの意見を押し通すという事は、自分達の責任を自分達で取るという事である。勝負は勝つか負けるかしかない。惜しいでは、次のゲームのチャンスはない。13人の仲間は、素質に恵まれていないが、集中力は一流であった。自分が何をすべきかを知っていた。最後まであきらめなかった。なによりもゲームに参加できることに喜びを感じていた。不思議なことに、練習以上の力を本番で発揮した。より正確に言うと、練習通りに発揮できない人がいても、練習では、さほどでなかった人がカバーした。私達がイメージしていた展開ではないが、試合を通じて伸びた力がゲームメイクしていった。後から思うと、トライアングルパスなどの基礎練習が、みんなの体に染み付いていたからかもしれない。なにより、13人が、サッカー好きになっていたからだとも考えられる。そう、チームメイトの信頼関係がパスを通し、勝利を呼び込んだのかもしれない。とにかく１試合ごとにタフになり、勝つ意識が浸透した。帝京といえども同じ高校生ではないか。我々は、この時、メンバーが自分達で考え、自分達で強くなる組織を経験した。これだけ自立的精神をもっているメンバーは、なかなか実社会でも少ない。西高のメンバーの自覚的レベルは最高であったと思う。このレベルは、天性の競技者というより、普通の挑戦者として、すなわち、運動神経ではなく、チームワークとしてのレベルである。

今、Ｊリーグが危機にある。しかし、考えてみると、サッカーが好きな子供人口は野球の３倍以上になっている。サッカー好きな女の子は、名サッカー選手の良き母になる。日本サッカーの基礎票は、十分育ちつつある。一時的な経営的危機はあろうが、サッカーの草の根はしつかり日本の大地に根付いてきている。我々も１サポーターとして、サッカーを通じて、人生を楽しむ日本人になろうではないか。

（追記）我々18期の13人は、GK山田、LB斉藤、RB竹本・前芝、CH小安、RH大内、LH伊藤・木原、LW橋本、LI加藤木、CF小林、RIには丹羽、RW森谷。

東京オリンピック時代の想い出

西高18期　橋本　　明

東京五輪が開催された昭和39年、私達西高18期生は高校２年生でした。東京～大阪間に新幹線か開通し、通信衛星によって海外の映像が生中継で見られるようになった頃のことです。この年は、例年10月に行われていた国民体育大会が５月に繰り上げて実施されたのをはじめ、すべてのスポーツイベントの日程がオリンピックによって少なからぬ影響を受けていました。

38年末にマネージャになった私は練習を早めに切り上げて、「翌年の特別日程を説明する」という都高校サッカー連盟の説明会に出席しました。説明会会場には都立新宿高校がよく使われましたが、冬の５時過ぎには新宿御苑脇にある同校の周辺が今と違って随分暗かったと記憶しています。

昭和30年代後半、東京における高校サッカーの公式戦は、地区リーグ戦兼関東大会予選（４～５月）、国体予選（８月）、全国大会予選（10～11月）、新人戦（１～２月）の４大会であり、未だ夏の高校総体（インターハイ）にサッカーは含まれていませんでした。ところが、39年度は国体の本大会が５月に繰り上げられたため、その予選は前年度に終了しており、春のリーグ戦以後秋の全国大会予選まで公式戦は行われませんでした。そして「全国大会も従来より期間を短縮して11月の１ケ月のみで行うため、春の地区リーグ戦上位校にのみ予選出場権を与える」というのが都高校サッカー連盟の説明でした。

このように春のリーグ戦時に全国大会の出場校を絞ってしまう方法は参加校が著しく増えた現在では当たり前のことになっていますが、オリンピックによる特別スケジュールが引き金となってこの時代あたりから導入されたようです。ともあれこのことは全国大会を最大の目標としてきた多くの学校にとって厳しい日程改正でした。特に、新２年生のみで戦わねばならなかった当時の西高にとっては、チーム結成後間もない春の成績がその年全体の戦果に影響するようなシステムは好ましいものではありませんでした。

とにかく決まった以上は５チームで争うリーグ戦で２位以内に入ることが当面の目標でした。顔ぶれを見ると西高のブロックは成蹊、桐朋、三鷹、小平が相手です。このうち当時関東でベスト８に入る力を持っていた成蹊には勝てそうにないので残りは全部勝たねばなりません。我々の年次は同年の部員が13人で、どうにか入学したての１年生の力を借りずに２年生だけでレギュラーを固めることができました。リーグ戦はいずれも僅差の試合でしたが成蹊戦以外はなんとかものにして一息つくことができました。

夏休みが近づいてから、思いがけない難題が降ってきました。校庭が改修工事のため８月から12月まで使用できなくなったことです。校庭以外の練習場所をどうやって探したらよいのか、あまり急な話で名案もなく、差し当たっては夏の合宿をどこでやるかが最大の問題でした。当時運動部の合宿は西高会館でやることがルール化されており、地方で遠征合宿をやることは禁止されていました。そこで比較的近くにある都立杉並高校へ伺ってサッカー部の顧問の先生にグランドの借用をお願いしたところ快く了承してくださり、ようやく夏合宿が実現しました。杉並高校には夏休み後も週に２～３回グランドを使わせて頂きました。自校のクラブ活動のやりくりだけでも大変なのに、同校のご親切は本当にありがたいことでした。（80頁参照）

練習場としては、この他に久我山にある朝日生命グランドを借用したこともありました。秋の日は短く、ボールなどを西高まで持ち帰るときには、既に真っ暗になっていました。また自転車通学の部員以外は用具を抱えての移動もかなり負担になったようです。このような状況でしたから、量的には満足な練習はできませんでしたが、遠征練習でチームの結束力が増し、全国大会都予選では準決勝まで勝ち進むことができました。決勝進出をかけた帝京高戦は負け試合でしたが、その結果が、翌日の毎日新聞のスポーツ欄（都内版ではなく）の片隅に載ったのを良く覚えています。

東京都を４地区に分けて実施した新人戦では、西地区ブロックで優勝することができました。他ブロックの優勝校は南葛飾、暁星、石神井であったと記憶しています。このときの我々の対戦相手は、國學院久我山、豊多摩、立川、日大鶴ケ丘、成蹊で、初参加の久我山を除けばいずれも今までに何回か手合わせをしたライバル校ばかりでした。特に決勝の相手成蹊には一度も勝っていなかったので最終戦でようやく目標を達成した思いでした。

東京オリンピックの期間は、学校も小講堂に当時としては大きなテレビジョンを設置して、生徒が昼休みや放課後に見られるように配慮してくれました。おかげで日本がアルゼンチンに終盤２点を入れて逆転勝ちし、ベスト８入りを決めた試合を生中継で見ることができました。どんな競技でもよいから五輪を見たいと言う人にとってサッカーの切符が一番容易に手に入ったこともあって、多くの国民がサッカーに関心を持ち始めました。それでも未だ高校生のサッカーに世間が注目するようなことはなく、運動部の中でもいわゆる３Ｋ（きつい、きたない、きけん）に属する部でしたから本当に好きでないと続けられなかった時代でした。

母校の校庭が使えない悪条件の中、お世話になった先輩は多数おられますが、直接合宿で指導して頂いたのは、12期小山忠さん、13期白石紀彦さん、15期小林武さんでした。あらためてお礼を申し上げますとともに、50年の歴史を刻んだ西高サッカー部OB会の更なる発展を祈念いたします。

我がサッカー人生の原点

西高19期　富田　六郎

今思えば、まさに蹴球部だった。とにかく蹴る技術を磨くことが第一で、高度な戦術を学ぶレベルにはなかった。中学からの経験を買われて（蹴る技術はできており、キック力はあった）、1年のときから試合には出してもらったが、初めての試合での相手バックの迫力に身をよけるしかなかった未熟さは、30年以上過ぎた今も忘れられない。新人で入部した多くの仲間も、1人、2人と去り9人に減ったが、結束力は固くなった。こんな仲間の活躍や失敗は克明に目に焼き付いている。サッカー抜きに西高は語れないし、大学、社会人になってもサッカー一筋は変わらず、人生の背骨をなしている。

体が動けば続けたいのだが、骨折、椎間板ヘルニヤと随分と試練を加えられてしまった体にはとても無理である。でも現代のサッカーは見るだけでも十分に楽しい。熱中するものがあると更に楽しく、今は地元レッズの応援が唯一のサッカーとの接点になっている。　最後に、悲喜こもごもの1年間の戦跡をまとめました。

○春の関東大会予選は、前年の東京都連続ベスト4の実績で何と第3シード。しかし2回戦負けの屈辱。トーナメント表の右最上部の西高の名が恨めしかった。

○区民大会は、実力伯仲でチャンスがあったが、準決勝で日大鶴ケ丘に負け、優勝は練習試合で2戦2勝の杉並、残念だった。

○全国大会都予選、1、2回戦連続の抽選勝の幸運。国体予選でくじを引いて負けた富田に替り、GK浅川にまかせたのが好結果。波に乗って4回戦突破。準々決勝で強豪城北に敗れベスト8、優勝は常勝帝京。

○練習試合には不思議と強く、6戦全勝。宿敵成蹊に大逆転で4－2で勝った試合が忘れられない。

○試合後何もお話しにならなかった岡田先生。杉並に2－0で勝ち喜んでいたとき、横で一言「2点ともPKでは…」。グランドを借りていた関係で再度練習試合をやり、PKなしで2－0。でもお言葉はありませんでした。

寸　　描

西高19期　中村　健一

1年生

私が入学した1964年秋のインターハイでは東京都ベスト4、翌1965年春の新人戦では優勝する等、先輩方が輝かしい戦績を上げ大いに刺激を受けました。

当時の木製ゴールポストは古くてグラグラしていましたが、ある先輩が材木を自ら調達し、運搬の上、新たに作り直して下さいました。現役部員の我々も一緒に作業したことを思い出します。とてもありがたい思い出です。

春季合宿は、1年生の終業式を挟んで日程が組まれていました。担任の菅野先生をして「君達一体どうしたんだ」と云わしめたほどの疲労の極致で式に臨んだことを思い出します。ゴールポストの前に1人ずつ立たされ、左右に出る球がゴールポスト内に入らないようクリヤーする練習等で徹底的にしごかれました。西高会館の食事は副菜が少なく、とにかく腹がへるので、ご飯にソースをかけたようなこともありました。

2年生

1965年秋のインターハイでは努力の甲斐あって、あれよあれよという間に東京都ベスト8に残ることができました。この年の2年生は部員が少なく、キーパーと左のインナーは1年生に出てもらいました。

高校生活の中でこの1年が最も短く感じられた年でした。勝つ喜びを実感しつつ強くなっていったと思います。

3年生

毎年我が校ではクラス対抗のスポーツ大会が行われており、サッカー戦ではチームの中心メンバーとしてサッカー部員は期待されていました。この年、以前から続いていたグランド整備が一段落した中で恒例のサッカー戦が行われましたが、私の蹴ったペナルティキックは無情にもゴールポストのバーにはね返されてしまいました。同期の部員は「グランド整備の盛り土で、ゴールポストの高さが狭まり、本来なら入っていたはずだ」と言ってくれましたが、悔しさに変わりはなく、ほろ苦い思い出の一つです。